



どれほど堅牢な砦でも、過ぎゆく時間には抗えない。

幾年もの月日を経て風化した壁は、本来の色など残っていない。それでも、強度は劣らない石造りの砦は、変人の巢窟と噂に名高い調査兵団の本部だった。

凍てつくような寒風が吹き付ける街並みは、人もまばらで静まり返っていたが、兵団本部内は、いつもと変わらず賑やかだった。

兵舎や食堂、訓練所や研究施設など、別々の建物に分かれているのを繋ぐ渡り廊下は、様々の兵士が行き交っていた。

屋根と低い柵があるだけの簡素な造りだが、どこに行くにしても、通る必要があるせいで、使用頻度が高い。

会議室や自室の周辺では、用のある人間も限られており、静かだが、食堂などにいると聞こえなくていいものまで耳に入ってくる。

今も扉の向こう側では、午後の訓練に向かう者の足音と共に、気になる声が目ざり込んでいる。

遅めの昼食を済ませ、のんびりと食後のコーヒーを飲んでいたりヴァイは、数分おきに聞こえる音に耳を澄ませていた。

最初は、軽やかな足取りで食堂を開けて周囲を見渡した時、リヴァイを見つけ、軽く頭を下げるだけだった。

それだけなら、気に留めなかったが、その僅か数分後、廊下側

から響き始めた声に、先程の行動が理解出来た。

「ハンジ班長？ハンジ班長？」

そんな調子の二週目は、まだ呑気な声色をしていた。

どこかに雲隠れした上官を、苦労性の副官が探していると云う、この兵団内ではよく見る光景だった。

名前を呼びながら歩き回っている姿は、困ったものだと言いたげでも、まだ余裕さえ感じられる。

しかし、三週目になると、流石に焦りや苛立ちが滲んでいるのが分かり、同情させられる。

「あく、もうっ！どこ行つたんだっ！時間ないのに！」

苛立ち紛れの鬱憤や、忙しない足音を耳にしていると、このまま素知らぬ顔で引き上げるのも気が引けてしまい、席を立てなくなつた。

破天荒な上司のせいで、自然と優秀になった副官が、探し出せないとなると、余程、想定外の場所に居るのだろう。

それが気掛かりで、居場所を模索しかけたリヴァイは、何気なく窓へ目を向けると、今にも雪が降りそうな曇天が広がっていた。

昼間なのに少し薄暗い様子に納得したように頷いた時、四週目にして、痺れを切らしたブリットが食堂に飛び込んできた。

「あ、いらしたっ！」

一直線にリヴァイまで駆け寄ってきたモブリットは、まるで訓練後の兵士並みに汗だくになっている。

まだ居残つてくれていた事に感謝と安堵に頬を緩ませたモブリ

ツトは、荒い息を飲み込みながら綺麗に頭を下げている。

「リヴァイ兵長、お疲れ様です」

一連の行動を耳にしていたリヴァイは、顔を見ただけで用件を悟っている。万が一に備え疑問で答える。

「なんだ？」

静かに顔を上げたモブリットは、恥じるように頬を引き締めるものの、最後の頼みの綱に縋るように見つめてくる。

「ハンジ班長を見かけませんでしたか？」

予想通りの言葉が返ってくる中、嘆息を吐いたリヴァイは、何気ない様子で窓へ視線を向けていく。

その先には、寒々とした中庭が広がっており、吹き付ける強風が窓を震わせている。

しかし、室内と外気の温度差のあまり、すっかり曇ってしまった窓では、外の様子は見え難かった。

再び視線を戻したりヴァイは、軽く背後を親指で差すと、何でもない事のように告げた。

「裏手の井戸は探したか？…そこに居なけりや、第三資料室の屋根裏だ」

弾かれるように目を見開いたモブリットは、逸る体を抑えるように、胸に手を当て敬礼した。

「お忙しいところ、ありがとうございます」

最後まで言い終わる前に身を翻したモブリットは、次の瞬間には、戸口に向かって駆け出していた。

慌ただしい姿を見送ったリヴァイは、舞い上がった埃を手で払い

ながら、とつと空になつていたカップを片付けた。

今年も雪の季節がやってきた。滅多に晴れ間が望めない日々。

脅威すら感じる悪寒は、寒さのせいでない。

いつ起るか分からない時限爆弾に、今から辟易させられる。

曇天に覆い隠された空が、自分の心境を代弁しているようで、苦いため息が零れたリヴァイは、静かに椅子から立ち上がった。

午後からはずっと書類整理ばかりで、凝り固まった首や肩を回しながら食堂にやってきたリヴァイは、食事をトレーに乗せてから、手近なテーブルに座った。

閑散とした食堂は人数も少なく、見知った顔ばかりになるのは、可能な限りピーク時を避けているからだった。

過酷な仕事に加え、絶えず付きまとう集団生活。

息が詰まる生活の中、食事くらいはゆつくりしたいだろうと言いつたのは、エルヴィンが団長になってからだ。

強制ではなかったが、自主的に時間を外そうとすれば、何故か後回しにする者の方が多く、時間によつては役職付きの面々しかいない事も珍しくない。

今日も残っているのは、長年顔を突き合わせている者ばかりだった。

その中でも騒々しい一角に気付いたリヴァイは、顔ぶれを見ただけで納得したように視線を反らした。

一口に干切った堅いパンを、具の少ないスープに浸しては口に放り込むと、代わり映えのしない味が広がる。

質素でも腹が膨れれば十分のリヴァイが、黙々と食事を続けている最中、一際賑やかだった人間が駆け寄ってきた。

「リヴァア————」

タツクルするように飛びついてきたハンジに、手加減などあるわけもなく、衝撃のあまり、一瞬息が止まりかけたリヴァイは、眉間の皺を増加させる。

煩わしさと苛立ちを躊躇なく、盛大な舌打ちで吐き出したリヴァイは、張り付く物体を足蹴にしていく。

「邪魔だ」

「痛つて——アハハツ、蹴飛ばされちゃったよ——」

豪快に笑い飛ばすハンジの顔がやけに赤く、怪訝な目を向けた時、ナナバがのんびり歩み寄ってきた。

「もう、ハンジったら、急に走り出したら何事かと思うじゃない。」

床に座り込んだままヘラヘラ笑っているハンジを余所に、ナナバは手にしていた酒瓶を机に乗せると、正面の席に座り込んだ。

表立つて禁止はされていないが、まだ早目の時間帯から酔っぱらいに遭遇するなど滅多にない。

「なんだ？こんな時間から酒盛りか？」

僅かに棘を含んだ口調のリヴァイに、大仰に肩を竦ませたナナバは、先ほどの酒瓶を軽く振つて、すでに中身がない事を証明させた。

「それがね……全部、一人で飲んじゃったみたい」

安い銘柄の葡萄酒は、手頃に入るだけ質も悪く、1本も飲み干せば、酔っぱらうには十分すぎる量だ。

普段から付き合い程度に飲む事はあっても、自ら深酔いするような性格でもないからこそ、余計に心がざわつく。

「……何があつた？」

元々悪い目付きが更に鋭利になり、まるで威嚇するように睨みつけるリヴァイに、新兵なら震えて平伏するだろうが、長年

一緒にいるナナバには脅しにもならなかった。

「分らないの、私が来た時には、もうこんな状態だったし・・」
自分も最初から居たわけでないナナバは、自分の方が理由を知りたいと言いたげに、言葉を重ねていく。

「少し前までモブリットも一緒だったんだけど、彼が言うには、
コシを持ち込んだのもハンジらしいよ」

空瓶を指差しながら呟くナナバから、モブリットの名前が出れば、当然のように疑問も重なる。

「・・？あのバカ、なぜ止めん」

副官と云う名のストッパーなのにと言いたいのを、飲み込むリヴァイに、ナナバは苦笑じみた笑みを浮かべた。

「止めるヒマもなかったのかしらね」

詳しくは分からないけど・・と、言葉を濁しつつも、静かに腰を上げたナナバは、いつの間にかリヴァイの背後から抱きついていくハンジを微笑ましそうに見つめた。

「じゃあ、私も明日早いから、後ヨロシク」

まるで責任は果たしたと言いたげに、その場から逃げようとするナナバに、咄嗟に呼び止めたリヴァイは、煩わしさを舌打ちに変えていく。

「・・おい、ちょっと待て、飯くらいゆつくり食わせろ」

「私が、食べさへてあげりゅお〜」

背後からのんびり手付きを伸ばしてきたハンジの手首を、スプーンに触れる寸前に掴み取ったリヴァイは、片足で隣の椅子を引っ張り出した。

そして、体を捻るようにして、ハンジを隣の席に押し込むと、奪われずに済んだスプーンを、トレーごとハンジから引き離していく。

「あえ〜？」

酒のせいで一瞬の出来事に思考が追いつかないハンジは、何が面白いのか、また笑い出してしまった。

陽気にはしゃぐハンジを、少し切なげに見つめていたナナバは、続けざまに窓へ視線を向けると、再びリヴァイへ視線を戻した。

「イイじゃない・・どうせ、今日はハンジのとくに泊るんでしょ？」

意味ありげに囁く姿は、完全に見透かしているのが癪に障るが、それを否定する程、リヴァイも幼くもない。

しかし、再びトレーに手を伸ばそうとするハンジの頭を、片手で押し戻したリヴァイは、苛立ち混じりに吐き出していく。

「俺は、飯くらい、ゆつくり食わせろ、つと、言っただけだ」

「分かったよ」

仕方なさ気に椅子に座り直したナナバは、ハンジの両手を緩く握ると、小さい子をあやす様に軽く振り始めた。

まだ半分以上残っていたスープは、とくに冷めてしまったが、早急に胃の中に流し込む作業に移るだけだった。